1457号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2024.8.26
〒690-0823島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

北海道への旅、三度目

木幡智恵美

18

「フェリーが新潟からも出ててなあ、それだと夜中出港じゃないから楽だと思うんだけど。フェリー代も舞鶴からより安いし。ただ、新潟までだと車で十一時間かかるけど、どう思う？」

まだ梅雨が明けないうちから夫の口から北海道旅行の話題が飛び出してくる。こっちは連休明けに起こした車庫での事故のことが頭にこびりついている。つい先日、壊れた塀を切って直してもらい、柱の曲がったカーポートを付け替え、傷跡は目の前からは消えた。けれども、心を抉った傷はまだまだ癒えそうにない。運転は、武道館往復と、子守りに玉湯に行く時のみ。その時でさえ、運転前に何度もアクセルとブレーキの場所を足で確認してからゆっくりと動き出すようにしている。どうしても孫を車に乗せて移動しなければならない場合は夫に頼み、私の運転する車には誰も乗せない。

「いやあ、新潟までは遠いよ。長く車に乗っているのは嫌だし、私が交代して運転する自信ないし」。そう答えてからまた一週間後くらい経って、「やっぱ、舞鶴からにしよう。ガソリン代のことを考えるとトントンだわ」と夫が言ってきた。

梅雨が明け、本格的な夏が到来。連日の猛暑の中、「そろそろフェリー予約したいけど、いつにする？」。夫の頭の中は北海道旅行モードに入っている。しかし、フェリーという言葉を耳にすると、キャンセルの電話をしたあの事故現場の情景が浮かんでくる。

「去年は囲碁大会と重なって、あっちを辞めたよね。今年は囲碁大会の後にしたら」と口では言うものの、心は全くついていっていない。

ぶつけられた時はワゴン車が私たちを守ってくれたとの思いで全く同じ形と色の車に替えた。が、その車で今度は自分がぶつけてしまった。車の自動制御装置に助けられたと思うようにしているが、やはり頭に浮かぶのは、「二度あることは三度ある」のことわざだ。

夫の気持ちをくじくわけにはいかない。これからも、夫は北海道旅行に向けての話をしかけてくるだろう。だが、私の傷跡はその時までに癒えるのだろうか。今年こそ、本当に三度目の北海道旅行が実現すればいいのだが…。（終わり）

がらがら橋日記

宮森健次

お返し

先月、コロナ患者急増のニュースが流れ始めたころにしっかり罹った。発熱、味覚障害、蕁麻疹、執拗な倦怠感など聞いていた症状を一通りさらうような半月を過ごした。しばらく稽古を休んだが、再開した矢先に今度は稽古場のサ高住に感染者が出た。幸いなことに広がりはしなかったのだが、大事を取って稽古場の提供を当面停止するからと連絡があった。初めから予想していたことで、当然の対応である。だがそうなると、塾の教室で稽古するほかない。

半年前に移転した教室は、住宅街にある単身者用２ＤＫである。これまで常時公開、どなたでも見に来てください、いつも常連さんたちが見守っています、など稽古の売りにしてきたが、一時的にせよそれができなくなった。以前に一度だけこの教室で稽古したが、子どももぼくもまったく調子が出ず、やはり聞き手がいる環境は必須だと確信していたので、仕方がないとは言え何とも悩ましかった。稽古休止もチラと頭をかすめたが、いざ六畳一間のお客もいない稽古場で子どもと一対一で向き合うのだと思ったら、不思議とやってみたいことがはっきりと浮かんできた。同時に、これまでの稽古に一種のもどかしさを感じていたことにも気づいたのだった。

東奥谷ではいつも四五人、サ高住では十人あまり、ぼくの後ろで子どもの話に耳を傾けている人たちがいる。ただ黙って聞いて、おもしろいときには笑い、終われば拍手する。口を挟むことなどないので、ぼくはお客さんの存在を意識せず、子どもに言いたいことを遠慮なく言えそうなものなのだが、実はそれが難しい。子どもだけに言っているようで、背後のお客さんにも言っているし、子どもたちもぼくの話を聞いているようで、お客さんの中に混じって一割くらい他人事のように聞いている。狭小アパートの一室で一対一の稽古をしてみたら、そのことがよくわかった。

先日、市内某公民館で寄席をした。子どもたちの落語の変化をはっきりと感じた。一対一の時に伝えたことを話の中にいくつも拾えた。それはとても繊細なもので、つまみをいくらか上げ下げする調整程度なのだが、お客さんに伝わるかどうかはそれが大きく左右する。子どもたち自身がそれを感じているらしいのがわかると、これぞ落語の醍醐味よ、と思う。六畳一間も捨てたもんじゃなかった。

公開していていつもだれかが見守ってくれています、そんなふうに言える稽古環境はこれからも貪欲に求めたい。でも、それだけではないよな、と今は思える。まあコロナにはひどい目に遭ったので、これぐらいのお返しはいただかねば。

30代フリーター　いま資本主義は資本主義以前へあとずさりし始めているように見える。世界の先進諸国で市場原理に反するようなバラマキ政策が行われたり、日本の「子ども食堂」のように贈与経済が復活したり。

年金生活者　極端な格差の広がりがそういう反動を生んだ。

　柄谷行人は経済を駆動する交換様式を4種の類型に分け、アルファベットで示している。A＝互酬（贈与と返礼）、B＝服従と保護（略取と再分配）、C＝商品交換（貨幣と商品）、D＝Aの高次元での回復の4タイプだ。各時代に支配的な様式はA、B、Cの順に推移する。Dはいまだ支配的になったことはなく、理想社会で支配的になると想定されている。

　資本主義社会で支配的な様式はCだ。それは市場での自由な競争を前提としており、必ず格差を生む。競争を駆動するのは富の稀少性であり、そうである限り、富が全員に十分行き渡ることはない。

　その格差を先進国内で広げたのが、グローバル化した資本主義だ。各国政府は国境の垣根を低くしてそれをあと押しした。それによって発展途上国の安い労働力を確保できるようになり、先進国の労働者が仕事を失ったり、賃金を抑えられたりした。

30代　それが反グローバリズムの「アメリカ・ファースト」を掲げるトランプを大統領に押し上げた。

年金　格差の広がり過ぎは体制を脅かす。先進諸国では民主制の危機となってあらわれる。社会の分断が深まり、多数決原理が機能する土台に亀裂が入る。米連邦議会襲撃事件はそれを象徴する事件だった。

　だから、格差を縮めるために、各国政府は国家が担う交換様式Bによる再分配の機能を強化しつつある。そのためにはグローバル化の流れをせき止めなければならない。再分配は範囲を限定しないとできないからだ。アメリカが中国に対抗して進める保護貿易主義は、その範囲を限定する作業でもある。

　格差の拡大は、資本にとっては、買い手を失うことを意味する。だが、競争原理に支えられる資本主義は格差をコントロールすることができない。国家に頼るしかない。その国家が機能を強化しようとしている交換様式BはCとは原理的に相容れない。その意味で資本主義はいまあとずさりを始めたということができる。

30代　自らの原理である競争をサボタージュし、国家の再分配機能への依存を深めるとともに、格差の拡大で復活した贈与経済に自らの領分の一部を明け渡しつつある。

年金　柄谷の交換様式論に即して言うなら、資本主義は交換様式C＝商品交換（貨幣と商品）を一部縮小し、あとを国家が担う交換様式B＝服従と保護（略取と再分配）と、個人や非営利団体が担う交換様式A＝互酬（贈与と返礼）で埋め始めていると言ってもいい。

　Bへの依存の例のひとつに脱炭素化がある。国家の補助金をあてにした電気自動車の開発などへの投資が欧州を中心に広がった。医療・介護産業の拡大も、保険の形をとった国家の再分配機能に支えられて進んだ。

　交換様式Aはこれまで資本主義の発展とともにCによって大部分を駆逐され、家族の中などに閉じこめられてきた。それがいま復活し、規模を拡大しつつある。資本主義が加速した富の稀少性の縮減がそれを可能にし、格差と貧困の拡大や災害の頻発がそれを必要としたからだ。

　災害ボランティアは労働力の贈与であり、阪神大震災のあと、そのシステム化が進んだ。子供や保護者が無料または低料金で利用できる「子ども食堂」は全国で9千カ所を超える（「NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ」）。このほか数多くの個人、NPO法人が様々な形でBを回転させていると推定される。現在の資本主義は「自己責任論」を掲げながら、「自己責任論」とは異なる原理で動くAへの依存を避けられなくなっている。

　資本主義のあとずさりは、交換様式のBやAが支配的だった時代の部分的な反復を意味する。もっと一般化して言えば、歴史が過去を反復していると言ってもいい。

30代　だが、歴史は繰り返さないとも言われている。

年金　もとの形を変えて反復する。その理由を思いつくままあげてみる。

　衰退に向かう社会が、失った勢いを取り戻そうとして、それがまだ存在していた過去に戻ろうとするから。次への飛躍を目指す社会が、そのための助走路を確保するため、後ろにさがろうとするから。社会も人間のように老い、老いれば人間と同様に子供帰りするから。子が親に似るように、社会もまた新段階は前段階を模倣するから。

　朝日新聞の「折々のことば」に「DNAがすごいのは、生命誕生の時から同じものを使い続けていること」（中村桂子）とあった（8月9日）。だとしたら、人間のすることにまったく新しいことなどないということだ。

　最も新しいことを目指すはずの革命は必ずと言っていいほど復古の形をとる。フランス革命の担い手たちも「ローマの衣装に身を包み、ローマの決まり文句を使って、近代市民社会を解き放ち、打ち立てるという彼らの時代の課題を成し遂げた」（マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』植村邦彦訳）。

ニュース日記　934

中村　礼治

あとずさりする資本主義